

小栗上野介情報83

ホームページHttp : //tozenji.cside.com/ Eメール : tozenji@clock.ocn.ne.jp



2022(令和4)年10月
発行:東善寺 住職 村上泰賢
群馬県高崎市倉渕町権田169
〒370-3401
Tel・fax:027-378-2230
〒振替00120-1-406206東善寺

対馬事件ー2

勝海舟「オレが交渉で解決した」は虚言 「氷川清話」通説の誤り

◇出版社によって勝海舟『氷川清話』内のタイトルが-講談社文庫「彼をもって彼を制す」/幕末維新史料叢書2・人物往来社「外交の秘訣」/角川文庫「ロシアの侵略主義」と異なります。

勝海舟『氷川清話』に対馬事件解決に関する談話がある
文久元年

「さあここだ、…かういふ場合こそ、外交家の手腕を要するといふものだ」として懇意にしていた長崎に居た英国公使オールコックに内密に頼み込み、北京駐在の英国公使から直に露国公使に掛合ってもらって「わけもなく露西亜^{ロシア}をしてたうたう対馬を引き払わせてしまった…。これがいはゆる彼に由りて彼を制するといふもの」

上記勝海舟の話を確認すると
通説[1]勝海舟→(長崎にいた)英国公使オールコックから→在北京英国公使→在北京露国公使イグナチェフに伝えて退去させた、と外交だけで退去させた話である。

この談話が一部歴史家に信じられ、次の歴史の史実

◆英国公使オールコック等の提案を安藤老中が承知したので英国軍艦が対馬へ行き退去勧告した史実(ただしビリレフは退去を拒否)とくっつけて、
通説[2]「勝海舟が英国軍艦を頼んでロシア艦を退去させた」というごちゃまぜの通説2にまで発展している。

*なんでも勝海舟の手柄にしたい通説。

*「内密に」…証明の必要がない、語り手に都合のいい話法。



▲ロシア人が掘った井戸跡
対馬・芋崎浦

勝海舟の言葉を検証する

◆勝海舟はいつ頼んだか… 「」内青文字は勝の言葉

「当時長崎に居た英国公使」オールコックは、文久元年四月二十三日に長崎を発して、五月二十七日に江戸に着いている。

したがって勝の働きかけはオールコックが長崎にいた四月二十三日以前でなければならない。もし勝の言うとおりの二月～四月に勝海舟→オールコック→北京の英国公使→北京の露国公使イグナチェフと動いて「外交家の手腕で…わけもなく対馬を引き払わせてしまった」なら、2～3ヶ月で解決したはずの話。事件発生の5ヶ月も経過した七月九日に英国公使オールコックが改めて軍艦派遣という別の提案を安藤老中にする必要はあるまい。

◆露国外務省は傍観者…露艦の対馬侵航滞泊は露国海軍の独走で行なっていることで、基本的にロシア外務省は傍観者の立場(小栗上野介情報82号参照)だから、外務省の露国北京公使イグナチェフに掛合った程度で解決できた、とは考えにくい。

・この対馬事件は前年1859安政六年四月と十一月にイギリス軍艦が対馬で不法に上陸・測量した事件を在北京公使イグナチェフから海軍大臣コンスタンチンに報告したことから発生しているのに(小栗上野介情報82号参照)、英国公使に言われてイグナチェフが撤退を指示したとすれば、とんでもない「マッチポンプ男」となる。

*近年「イグナチェフは全権公使で軍事指揮権を有している。リハチョフ提督に(退去)命令を出せる」(上垣内憲一『勝海舟と幕末外交』中公新書2014年)とする通説[1]を補強する説が出た。しかし、

・提督リハチョフが中国海域連合艦隊司令官に任命された訓令書には「在北京公使N・イグナチェフ陸軍少将の配下に入ることになっている艦隊の指揮を貴下に委ねる」(ウラジミール・S・ソボレフ「露日関係史料としてのリハチョフの中国艦隊の文書」)とリハチョフに艦隊指揮権を付与する指示が出ているから、上記の上垣内説は通らない。

【対馬事件 余話】『小栗上野介が転封を対馬藩に強要した』とする説＝濡れ衣

(上垣外憲一『勝海舟と幕末外交』中公新書・2014平成26年刊・抜粋)

「小栗は対馬を天領としてロシアに浅茅湾を軍港として貸付ける。…追い出される対馬藩から強烈な反発が出るし、対岸の長州も…うまみのある対馬経由の貿易が一切不可能になるということで必死の抵抗をするはずである…」

として、それが理由で「…小栗は官軍によって処刑されるが、その原因を対馬問題の時から作っている…」

* 論拠を示さず・事実誤認で6年後(慶応四年)の西軍による小栗父子主従殺害を正当化している

○転封を強要したか…時系列で見ると

・三月二十八日 対馬藩は江戸藩邸の協議で藩政の基本方針として以前から江戸家老佐須伊織等を中心にくすぶっていた移封要望を決議した (資料:日野清三郎『幕末における対馬と英露』)

賛成論…生産性の低い対馬/朝鮮人参の国内生産普及などで朝鮮貿易の旨味が薄れている

反対論…元寇と戦い戦死した先祖宗助国=藩士の誇り・島民の尊敬信頼のもと/露艦対応困難で移封要請は武士の恥

・四月六日 幕府は小栗上野介等に対馬「見回り」を命じた→小栗は咸臨丸で五月七日対馬着

*小栗上野介が対馬事件に関わる以前に藩では移封を要望することを決議しているのに、なぜ「小栗上野介が強制した」ことになるのか、根拠史料も示さず「移封を強制した」「ロシアに浅茅湾を貸し付ける」とするのは理解に苦しむ。

○小栗主従は「官軍に処刑」されたのではない

上垣内氏はこの濡れ衣を元に、西軍による〈小栗父子主従8名を殺害一家財没収―入札で売り払い―軍資金とした〉ことを正当化する記述につなげている。「処刑」とは取り調べて罪状を明らかにした上で行うこと。取り調べなしで殺害し財産を奪った「官軍」の行為は強盗殺人という

*「官軍」…「官」の反対語は「民」のはず。ところが日本語は「官軍」の反対語を「民軍」でなく「賊軍」(何をしても悪い軍隊)とした。すると「官軍」は〈何をしても正しい軍隊〉になれる。このとんでもない決めつけ言葉が、明治以降の官主主義政治の基調理念となっている。



▲金石城跡



◆小栗上野介顕彰会機関誌

『たつなみ』47号発行

講演要旨 『開成をつくった男・佐野鼎^{かね}』の取材から見えてきた小栗忠順との接点 作家柳原三佳／リエージュ製エンフィールド銃 峯田元治／「小栗忠高の命日のナゾ」は跡目相続の時間 村上泰賢／追弔「市川光一氏」市川平治／史料紹介「小栗上野介」福地源一郎／本の紹介など

◆日本産業革命の地 横須賀造船所の弟

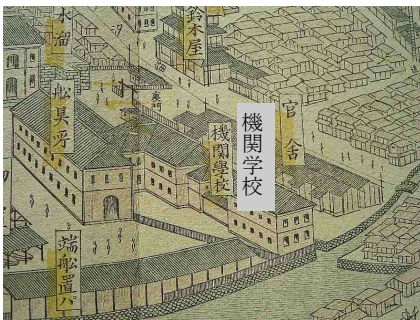
中島飛行機

産業工学は造船・機関工学～飛行機工学～宇宙工学と発展



◆中島知久平

(群馬県尾島村の農家出身)は、明治40年横須賀の海軍機関学校▶を出て海軍工廠に勤めながら、飛行機を研究



◆中島知久平の主張

- ・飛行機は民間会社で製造すべき…いま陸・海軍が国家予算で造っているのは官営事業であり、非効率。民間会社ならモデルチェンジを何回もでき、世界最新鋭の飛行機に遅れないものが造れる。
- ・日露戦争以来の大艦巨砲主義を批判…大砲で20キロ先まで飛ばしても当たる確率は低い。飛行機なら何百キロ先までも運んで正確に落とせる。戦艦1隻の予算で飛行機なら3,000機造れる。
- ・飛行機の活用…飛行機は今後さらに改良され、魚雷や爆弾を携行できるよう機体構造が発展して軍事上重要な武器となる。航空母艦方式なら実戦的、かつ経済的。経済力が弱く資源に乏しい日本はもっと飛行機を活用すべき。と提唱。

中島飛行機の技術が入ったはやぶさ2 ▲

◆肩衣^{かたぎぬ}で小栗家の家紋「丸に立波」が確認できた



【小栗上野介の遺品】

肩衣^(かたぎぬ)

下に袴^{はかま}をつけると「袴^{かみしも}」となる
寄進者:萩原ヨシ様(旧秋間村)

◆昭和30年代初め、碓氷郡秋間村(安中市)から萩原ヨシさんが「古着の商売をしているがこれは小栗様のものではないか」と広げた品がこの肩衣。麻地に細かな萌葱^{もえぎ}の江戸小紋がほどこされ、両胸と背中に間違いなく「丸に立波」の小栗家家紋がついた夏の肩衣だった。小栗公の汗の跡も残っている。

◆当時、秋間村から権田へ来るには、秋間からバスで安中駅一信越線で高崎駅一高崎からバスで一権田までと、半日がかりで運んでくれたヨシさんの見識と努力には今も感謝している。

◆この肩衣で寺紋1の正式

家紋2略紋東善寺本堂(銅板屋根へ改修前)

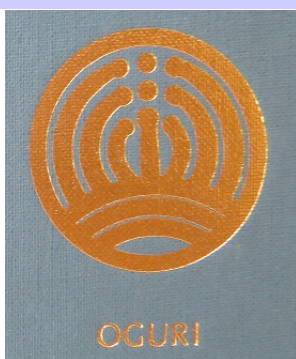


な小栗家の家紋「丸に立波」が確認できた。染物屋・提灯屋・石屋・看板屋等必携の『紋帖』にも記載されることが少ない「小栗の丸に立波紋」である。東善寺は中興開基家である小栗家の家紋を寺紋としているが、昭和12年の火災後再建された本堂屋根に、下部の水が略された家紋2の略紋を使用していた。令和元年の銅板屋根に改修後は正式な寺紋1を使用している。

◆3は東京富士美術館蔵「小栗上野介所用」と称する甲冑^{かぶと}かちゅうにつけられた紋。これまで見たことのない略紋との説明だが、品のないひどい略され方や、文久二年製というが「小栗家計簿」にそれらしい支出がない、合理的思考をする小栗が遣米使節で米国の進んだ武器類を視察したのに、帰国後に旧来の甲冑を製作するか…などから甲冑の真贋も疑問視されている。

家紋4は『第一遣米使日記』(日米協会・大正7年)表紙の「OGURI」紋。これもひどく略されているので、アメリカ側史料によるものと思われる。

家紋4『第一遣米使日記』の表紙



3 東京富士美術館の鎧の紋(撮影禁止で手描き模写)



しかし、誰も立ち上げないので

◆飛行機会社設立 海軍を退職し→横須賀から尾島村に技師・職工を集めて中島飛行機研究所→太田町に中島飛行機製作所を設立→昭和6年に中島飛行機株式会社を興し、呑龍工場(太田町)で生産を開始。すべて一貫生産で日本最大の航空機・航空エンジンメーカーとなった。

◆飛行機王 陸軍機として鐘馗^{しょうき}、呑龍^{どんりゅう}、疾風^{はやぶさ}、海軍機として月光、天山、彩雲、などを製作。さらに超大型重爆撃機富嶽^{ふがく}、国産初のジェット機橘花^{きっか}など。三菱製の零戦もエンジンはすべて中島製で、のち中島も機体製作するなど、日本の航空機全体の機体生産量は28%を占めた。第二次世界大戦終戦までは東洋最大、世界有数の航空機メーカーとして知られ、中島は「飛行機王」と呼ばれた。



▲戦闘機「隼」

◆戦後は財閥解体で工場ごとに分立

スバル(富士重工)／THKリズム(浜松)／富士機械(前橋)／輸送機工業(半田市)／マキタ(三島市)／GKNドライバイントルクテクノロジー(栃木)／イワフジ工業(黒沢尻)／(プリンス自動車工業(東京)→ニッサンに合併「技術のニッサン」の元)／宇宙工学・IHIエアロスペース(富岡市)・・宇宙ロケット「はやぶさ」「はやぶさ2」…などに現在も造船技術・飛行機技術の粋が光っている



回収カプセル

© JAXA